

海外 稲門会の躍動

Overseas TOMONKAI

登録稲門会 検索

現在、約70の海外稲門会が世界各地で活動しています。海外に滞在する際は、現地の稲門会を検索して参加してみましょう。
※一部、活動休止中の稲門会もありますことを、ご了承ください。

会長メッセージ

早 稲田の森の同窓が、縁あって中東カタールで出会い、稲門会旗の下に集まってから早1年余りが過ぎた。
首都ドーハの湾岸に立ち並ぶ独特なデザインの高層ビル群は、カタールの発展を象徴する風景だが、これは同国が量産するLNGのたまものである。このLNGの開発に当たっては、日本の先達せんだつが随分と活躍したのだが、カタールも東日本大震災後のエネルギー不足の際に日本にLNG

を優先して送るなど、ガスを通じた両国の絆は強い。
「これからは、人と人との絆も強めたい」
この思いから、カタール稲門会は日本語スピーチコンテストへの協賛を通じ、日本を知りたいと願うカタールの若者を応援する活動を始めた。そうした若者がいつの日か早稲田に留学し、彼らを稲門会に迎える日が待ち遠しい。
小寺保彦(1983年理工)

会員からのメッセージ

砂 漠の国カタール。国土全体が平坦で変化に乏しい岩石砂漠であり、ラクダが旅するような砂漠は国の南部に若干見られるのみ。陸生脊椎動物の種類は日本の半数以下だが、鳥類は比較的豊富であり、渡り鳥を含めると300種以上が記録されている。
大多数の日本人は日本の組織に属してカタールに赴任しているが、出稼ぎ労働者である私はカタール大学に勤めて今年で10年目を迎える。早稲田大学とカタール大学の間には学生の行き来がある。稲門会発足によってカタールにおける早稲田大学の評価はさらに上がることであろう。
山口誠之(1990年教育、92年工研修)

としています。
日本とカタール、早稲田大学と当地大学の距離が、今後ますます近づくことを望んでいます。
Eri Palmer (渡辺絵里)(1996年教育)

20 10年、校友の先輩夫婦がドーハ駐在を終わる直前、カタール稲門会準備委員会を催し、「カタール稲門会を発足せよ!!」との密命を下す。15年、密命を受けた私が「ドーハに稲門旗を立てよう」を合言葉に、数人の同志と砂漠でテント会合を開始。16年、小寺会長をお迎えし、約20人の同志とカタール稲門会を発足。三田会と並び、カタールで最大規模を誇る校友組織となった。
伊藤利之(1992年教育)

在 学時、一度も歌ったことのなかった校歌や「紺碧の空」を、日本から遠く離れた砂漠の国カタールで歌うことになるとは思いませんでした。社会人生活の半分以上を過ごし、第二の故郷になりつつあるカタールで、稲門会を通じて愛校精神が芽生えてきたことも何かの縁かと思えます。
かつては世界で最も退屈な国といわれていましたが、今は大発展を遂げています。カタールを目的地に遠路はるばるとまではいかないかもしれませんが、トランジット等でお越しの際は、ぜひお立ち寄りください。
重森貴裕(2012年法学)

カタール稲門会について

カ タール稲門会は、2016年1月29日に設立されました。会員数は20人です(17年3月現在)。大使館職員、日本企業の駐在員、カタール大学の教員、現地企業の社員、主婦の他、時には出張者や学生も交え、アットホームな会合を定期的に開催しています。最近では、カタールの日本語学習者を対象とした「日本語スピーチコンテスト」において、スポンサーとして協賛し、参加賞を提供する活動も行っています。
横井裕一(1998年法学)



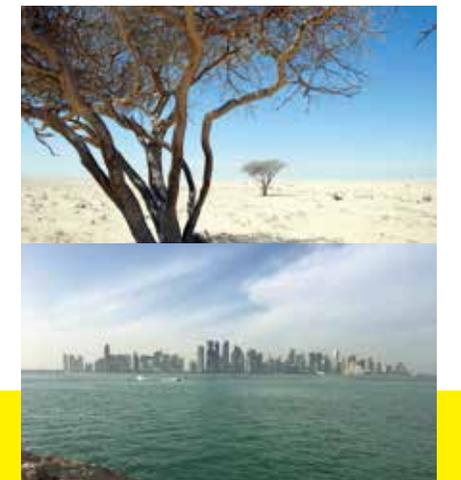
日本語スピーチコンテストにて参加者の皆さんと

カタールの魅力

カ タールはペルシャ湾(アラブ諸国では「アラビア湾」と呼ぶ!)の南岸にある、秋田県とほぼ同面積の小さな国です。1970年代、国の北東部に広がる海底ガス田の発見により、2010年代にLNG(液化天然ガス)の一大輸出国へと変貌を遂げました。現在、1人当たりのGDPは世界有数、世界一裕福な国と呼ばれるほどに急成長しています。10年前まで100万人にも満たなかった人口は、現在では250万人を超えています。
14年には中東の新しい玄関口としてハマド国際空港が開港。19年の開業を目指してドーハメトロ(地下鉄)の建設も進んでいます。さらに、22年に開催予定のFIFAワールドカップに向けて、スタジアム、ホテル、商業施設の建設ラッシュが続いています。
カタールで生活する上で一番大変なのは、夏の暑さです。7月~9月には50℃前後まで気温が上がります。冗談のようですが、水道から熱湯が出てきます。太陽の熱で目玉焼きができます。ゴルフのアイアンを素手で触ると、軽くやけどします。また、イスラム教徒が多いため、豚肉類、アルコール類は国内に持ち込み禁止、みりんも持ち込めないほどの厳しさです。日本に一時帰国の際は、どんな高級料理よりも豚骨ラーメン、

餃子セットが外せません。
某ガイドブックで、かつては「世界で最も退屈な町」、今では「今後の発展が最も楽しみな町」と表現されているカタール。隣国ドバイのようなきらびやかなナイトライフは期待できませんが、近年は観光事業にも力を入れており、四輪駆動車で砂丘を駆け巡る砂漠ツアー、アラブの伝統的な木造船で楽しむクルーズ、野外市場「スーク・ワキーフ」などが楽しめます。
樋上智之(1997年商学)

(上) アカシアの木がまばらに見られる中部の砂漠
(下) 沿岸部からドーハ都心部を一望する



第2回カタール稲門会の会合にて

